

糖尿病性認知症(3型糖尿病、脳の糖尿病)・・・(4)

糖尿病には、1型糖尿病(体内でインスリンが産生できなくなったもの)と2型糖尿病(身体の反応が不十分になったもので全糖尿病の95%に相当)がある。

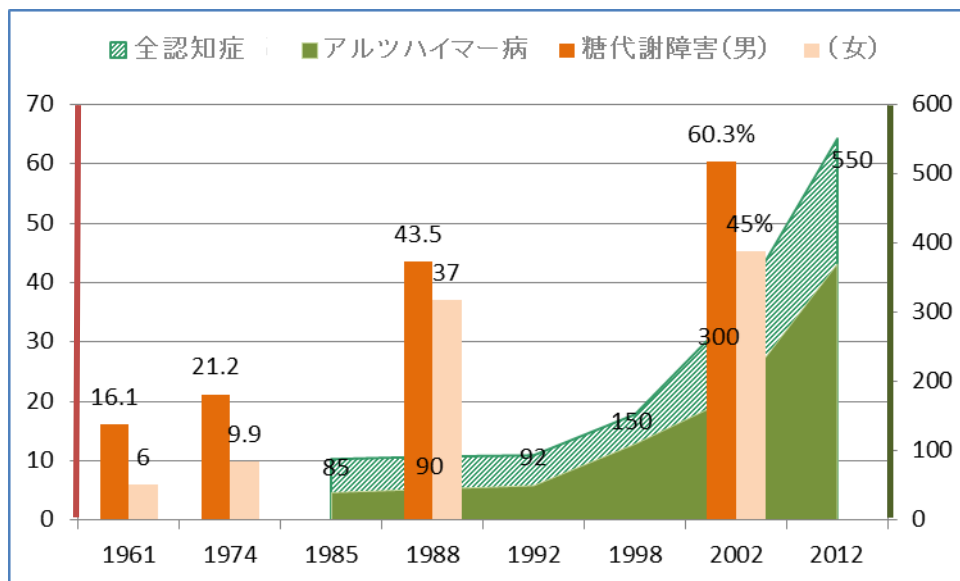
インスリンは膵臓で作られ中枢神経とは無関係と考えられていましたが、脳にもインスリン受容体があり血管脳関門を通り抜け、1980年代頃より少量だが脳でも作られていることが分かってきました。

脳内におけるインスリンはエネルギー代謝だけでなく、それとは別に記憶や学習を司っています。そして、アルツハイマー病では、脳内インスリン濃度が通常の四分の一、受容体は十分の一と減少していたことより3型糖尿病と呼ばれました(de la Monte, 2005)。

糖尿病は網膜症、腎不全、末梢神経障害の三大合併症があります。最近、糖尿病において脳血管性認知症の相対危険度が1.8倍、アルツハイマー病が2.1倍と高値であり、ハンチントン病患者は糖尿病の罹患率が平均より4倍高く、

パーキンソン病患者の半数が糖代謝に異常を認めるなど脳疾患と密接な関連を認めています。

65歳以上の糖代謝異常と認知症数推移



上図は九州大学による久山町疫学調査をもとに全国の認知症推定数と糖代謝異常率を併記したものです。1992年、65歳以上の認知症数は92万人(1.8%)ですが、2012年には550万人(12.3%)と急増しています。この数字は単に寿命の伸びで説明はつかず、食後血糖値の高い予備群を含めた糖代謝異常が認知症の危険度を高めていると解釈されます。

太り気味で白いご飯が大好きで、朝食の方は要注意です。

